

## 令和6年度 昭和館作文コンクール 審査結果

| No | 作品番号 | 氏名     | 学校名・学年             | 賞       |
|----|------|--------|--------------------|---------|
| 1  | 269  | 小林 純一郎 | 板橋区立志村坂下小学校・6年     | 厚生労働大臣賞 |
| 2  | 631  | 古賀 英琳  | 広尾学園小石川中学校・2年      | 昭和館館長賞  |
| 3  | 628  | 杉本 賢太郎 | 金沢大学附属中学校・1年(石川県)  | 優秀賞 1   |
| 4  | 55   | 前田 実穂  | 練馬区立中村西小学校・6年      | 優秀賞 2   |
| 5  | 95   | 越後 菜々子 | 練馬区立中村西小学校・6年      | 優秀賞 3   |
| 6  | 400  | 門之園 結希 | 習志野市立屋敷小学校・6年(千葉県) | 優秀賞 4   |
| 7  | 128  | 佐竹 七織  | 土佐女子中学校・3年(高知県)    | 優秀賞 5   |
| 8  | 271  | 田村 怜   | 板橋区立志村坂下小学校・6年     | 優秀賞 6   |
| 9  | 557  | 江澤 凜   | 川口市立神根中学校・3年(埼玉県)  | 優秀賞 7   |
| 10 | 626  | 岸澤 東子  | 江東区立明治小学校・6年       | 優秀賞 8   |

## 心の苦しみ

板橋区立志村坂下小学校 6 年生

小林 純一郎

僕は 9 月に社会科見学として昭和館を訪れました。その時は、様々な展示物を見たり、体験したりしました。けれども、展示物から、それにどのような願いや思いがこもっているか、というところまで考えることは時間の都合上できませんでした。そのため、より細かいところまで見たいという気持ちが芽生え、再度来館することにしました。そのときは自分のペースでじっくり展示について考えることができたので、前に来たときとは違い、それぞれの展示物に込められた思いも伝わり、一つ一つに感動してしまいました。

展示物はたくさんありましたが、一番心に刺さったものは、中国へ従軍した兵士が妻や子供に宛てて書いた手紙です。その手紙には会えない家族への想いがつづられていて、戦争に行った兵士一人ひとりに帰りを待つ大切な人がいるのに、会いたくても会えないという苦しさを感じました。昭和館ではほかにも、地域別の戦没者数が書かれている地域別戦没者数概見図というのを見ました。その図によると、合計戦没者数は 240 万人でした。先程の手紙とつなげて考えてみると、240 万もの人が、家族や友人に会いたくても会えずに悲しみながら死んでしまったと推察できます。

僕の曾祖父は、第 2 次世界大戦を経験しました。彼はすでに亡くなっていますが、戦争で彼が体験したことを詳細に記した自伝を残しました。それには、曾祖父が朝鮮とビルマの 2 箇所に合計 8 年間滞在したときのことについて書かれていました。8 年間も戦争にかり出されていたということは、展示されていた手紙の兵士が感じていた家族に会えない苦しみを曾祖父も経験していたということだと思います。そう考えると、今まで他人事だと思っていた戦争が、僕の身近な人も含めた何千万人もの人々にトラウマを植え付ける、言い表せないほど悲惨なものだったことが身に染みてわかってきました。

現在では、ロシアとウクライナ、イスラエルとパレスチナなどたくさんの地域で戦争が起こっています。その戦争に参加している兵士たちは、国からの命令で戦いに行かされて大切な人と会うことができなくなっている状態の人がほとんどです。第 2 次世界大戦で戦争に参加した世界中の人々が体験したような苦しみを感じている人が現代でもたくさんいるのでしょう。

戦争には、人の命だけでなく人の心までも壊す力があると思います。その戦争の恐ろしさ、悲惨さをこれからの世代にも語り継いでゆき、戦争をどのようにしたら止めることができるのかを考え続けていくことが世界から戦争をなくすための第一歩になるのではないかと思います。そのためにも、僕は今回昭和館に行ったことで得たこのような考えをこれからも忘れずに胸のうちに留めておきます。

## 平和を紡ぐ

広尾学園小石川中学校2年生

古賀 英琳

私の祖父は現在 90 才の戦争経験者だ。祖父は、小学 5 年生だった 1944 年の秋から、東京から新潟へ、家族と離れ学童疎開していた。

疎開中は常にお腹が空いていて辛かったこと、疎開先の人たちに差別されて子供たちでハンガーストライキを起こしたこと、家に帰りたくてたまらなくて貨物列車に忍び込んで東京まで逃げ帰った子がいた話、終戦間近には学童疎開先近くの長岡も空襲に遭い、祖父たちは山奥へとみんなで逃げたことなど、時々、祖父は戦争体験を話してくれる。祖父が小学 6 年生の 1945 年 8 月 15 日に終戦の日を迎え、戦争が終わってもしばらくは殺されるかもしれないと、祖父は親戚と新潟で生活し、10 月にやっと東京へ戻ったそうだ。「死と隣り合わせ。疎開中はいつも空腹。人間らしい生活はできなかった。戦争は絶対にもう繰り返してはいけない。」と祖父は語る。

先日、昭和館を家族で訪れた。昭和館は戦争を追体験できる場所だった。昭和館の貴重な展示物を見ると、祖父の体験談、戦争というものの現実味を感じた。空腹に耐えられず疎開した児童が食べていた胃腸薬や、疎開中の食事など、当時の生活の様子が分かる展示、戦時中の様子が記録されたたくさんの写真など、飢えに苦しみ、常に死と隣り合わせという想像を絶する辛い思いをした人や命を失ってしまった人が大勢いたという事実が胸が締め付けられた。

戦争は人が殺し合う残虐な行為だ。戦争は子供の命や自由までも簡単に奪ってしまう。人が人を殺すのは悪いこと。世界中の人が思いやりと優しさを持って、協力して戦争のない平和な世界を作らなければならない。昭和館のような施設に足を運んだり、体験談を聞いたり、本を読んだりして、戦争について学び、平和の大切さを考えることが重要だと、昭和館を見学して私は改めて思った。

私たちは戦争を実際に経験した人から直接話が聞ける最後の世代だ。祖父たちのように悲惨な経験をしてきた人たちの、平和な世界にしたいという強い願いを受け継ぎ、実現していくのが、私たちの使命だと思う。私の夢は児童文学作家になることだ。今日でもウクライナやガザ、アフガニスタンなど世界中で理不尽な紛争や内戦が絶えない。子供たちに、戦争の残酷さと平和の尊さを語り継ぐ言葉で、私は平和を紡いでいきたい。